



醫學の進歩に伴う 治療形態の變化

今からだいぶ前のことであるが、ある外科医が「ノーマス療法」という言葉を使つて、從來メスを用いて治療した病気のあるものを、切開によらず、注射又はその他の方法で治癒させることができるかと述べていたことがあるが、化学療法の盛んに行われる現代に於ては、この傾向はますます強くなつてゆく。日常最もありふれた疾患でこの種の代表的なもの二、三を次に挙げてみよう。

1. フルンケル及びカルブンケル

フルンケルを切開するのはむしろ稀な場合であつたが、カルブンケルは以前は例外なく切開したもので、その治療日数も長く、豫後の危険な場合も少なくはなかつた。スルファミン剤の出現によつてその治療はたいへんらくになり、ペニシリンが使われるようになって文字通りノーマス療法が可能になつた。フルンケルはチアゾール等の内服だけでも事足りる場合が多いが、炎症が強い時期に3万單位ぐらいのペニシリンを1日1回局所に注射すると著明な効果がある。この際ペニシリン溶液の濃度はなるべく濃くし、之に1—2%の鹽酸プロカイン1cc位を混じて注射すると、烈しい疼痛を避けることができる。カルブンケルならばその輕重に應じて、ペニシリンの局所應用だけでなく、間歇的筋肉内注射も必要であり、スルファミン剤の適用や、糖尿病のある時にはもちろんインシュリンの注射を欠いてはならぬ。

この化学療法によつてカルブンケルの治療日数は著しく短縮される。

2. 癰 疽

初期ならばペニシリンの局所注射だけでよいが、病狀に應じて筋肉内注射を併用する。後者は3—10万單位毎日1回で十分である。炎症が進んで化膿や壞疽の強いものには切開の必要はあるが、それでも以前の様に大きく切らなくてすむ。切開後も局所へのペニシリン注射は毎日反復し、スルファミン剤の内服をも併用する。

3. 急性中耳炎

初期に10—20萬單位のペニシリンを筋肉内注射（1日1回又は2回）するだけで治癒することが多い。

4. 乳 腺 炎

本症もかなりの程度まで切開せずに、スルファミンの内服とペニシリンの局所及び筋肉内注射で治癒させることができる。波動を呈するに至つた時は、たゞその膿汁を排除するだけの小切開を加えるにとどめる。從來のような切開手術を行つた場合に比して、治療日数は数倍以上短縮される。

× × × ×

以上挙げた疾病は実地医家の最も頻繁に取扱うものであつて、從來の切開療法とこの化学療法とを比較すれば、その治療日数の差は誠に著しいものがあり、この点患者の爲には頗る有利であるが、他方これに要する薬品がかなり高價であることは、個々の例によつては一考を要する場合もあるであらう。殊に保険診療で問題になることも考えられる。しかし病氣が早く治れば、結局は安いことになるのであり、又ペニシリンをこんなふう頻りに使用して需要が増せば、それだけ生産費も割安となつて値段も下つてくるわけで、その方面からも治療費は益々安くなつてゆくものと考えられる。（T・Y）